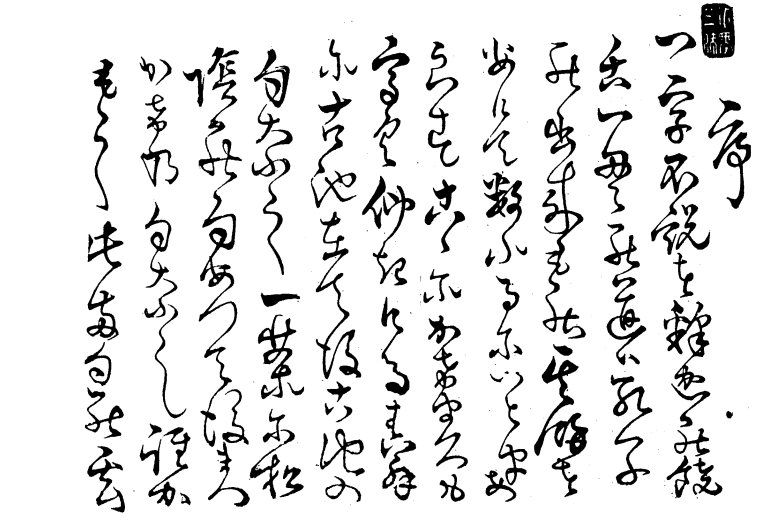
木發句集

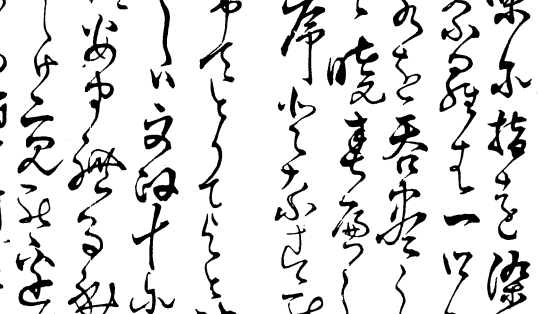
上



印

序

一字不説は釋迦の饒舌、一貫の道は孔子の出來もの、其餘はあげて數ふるにいとまあらず。ここにかけまくも高く仰ぎけるは、翁に古池（の句二字脱カ）在て後古池の句なし。一茶に松陰の句あつて後まつかげの句



なし。誰かもし此兩句の玄味に指を染むとならば、一口に兩江水を呑盡して始て曉すべし。

是を序となすのみ。

ふでとりてよと請れしは文政十にふたつあまれる秋、玉くしげ二見の邊りに住ける碓房題

印 印

僧諧寺
一茶肖像
春甫憲信謹

あのあたり
まるまるよ
ひいき目みて
さくらさき
てあるかな

一茶

一茶發句集上

春之部

元日や上〻吉の淺黄空

元日も立のまんまの屑家哉

還暦

春立や愚の上にまた愚にかへる

新家賀

年立や雨おちの石凹むまで

蓬萊や唯三文の御代の松

富士画に

初春や千代のためしに立給ふ

長谷の山中に年籠りして

我もけさ清僧の部なり梅の花

三崎の井は遊女柏木がかた

みなりとかや

若水のよしなき人に汲れけり

福わらや十ばかりなる供奴

かま獅子が腮ではらひぬ門の松

（此句巣兆が自撰自筆の句集『曾波可理』にあり）

逃しなや水祝るゝ五十聟

初夢に猫も不二見る寢様かな

袴着て芝にころりと子の日哉

小松引く人とて人のをがむなり

垢爪や薺の前もはづかしき

天神參

ちさい子の麻上下や梅の花

梅の木や欲にや願はぬ三日の月

梅折や盗みますぞと大聲に

相馬覽古

梅が香や平親王の御月夜

梅咲や唐土の鳥の來ぬ先に

月の梅の酢のこんにやくのとけふも過ぬ

笠着るや梅の咲日を吉日と

山鶯よりもめづらしく新金

を齒にあてけるを

二歩判の初音出しけり梅の花

下戸村やしんかんとして梅の花

梅の花爰を盗めとさす月か

そら錠と人には告よ梅の花

嶋原

入口のあいそになびく柳哉

犬の子の踏えて眠る柳かな

けろりくわんとして鳥と柳哉

御殿山

鶯も親子つとめや梅の花

うぐひすにあてがつておく垣根哉

鍬の柄に鶯鳴や小梅村

黄鳥のまてにまはるや組屋敷

松室にあそぶ

うぐひすの馳走にはかぬ垣根哉

黄鳥や泥足ぬぐふ梅の花

鶯ののにして鳴や留主御殿

うぐひすやよくあきらめた籠の聲

老婆洗衣画

彼の桃が流れ來るかよ春霞

輕井澤

笠でするさらば〳〵やうす霞

菜翁とあそぶ

此門の霞むたそくや隅田の鶴

栗之六十賀

古松や又あらためていく霞
けふも〳〵霞んで暮す小家哉
誰それとしれて霞むや門の原
西山やおのれが乗るはどの霞

小兒のあどけなきを

鳴猫に赤目をして手まり哉

素鏡が母八十八才賀

門畑や米の字なりの雪解水
雪どけや驚が三疋立臼に
世にあればむりにとかすや門の雪
庵の雪下手な澄樣したりけり
門前や杖でつくりし雪解川
三日月はそるぞ寒はさへかへる
藪入や墓の松風うしろふく
芽出しから人さす草はなかりけり

店開賀

福の來る門や野山の朝笑ひ
かくれ家や猫にもいはふ二日灸

初午

花の世を無官の狐鳴にけり
齒も持たぬ口にくはへてつぎ穗哉

一年を賣て親を養ふは孝行

云(はし)ん方なし

出代や汁の實なども蒔て置
出かはりやいづくも同じ梅の花

二月十五日雪ふりけるに

花のところへ雪のふる涅槃哉
寢て起て大欠して猫の戀
蒲公英の天窓はりつゝ猫の戀
うかれ猫希妙に焦てもどりけり
行がけの駄ちんに鳴や小田の雁

板橋

かしましや江戸見た雁の歸り樣

閏二月二十九日といふ日、雨も漸おこたりぬれば、朝とく頭陀袋首にかけて、足ついで例の角田堤にかゝる。東はほの〴〵しらみたれど、小藪小家はいまだ闇かりき。しかるに上のならせ給ふにや、川のおもてに天地丸赤〳〵とうかめて、田中は新に道を作り、みぞ堀はと〳〵く板をわたしておの〳〵御遊を待と見へたり。誠に無心の草木にいたる迄春風に伏しつゝめでたき御代をあふぐとぞ覺へ侍る。

五百崎や御舟をがんで歸る雁

善光寺

開帳に逢ふや雀も親子連
雀の子そこのけ〳〵御馬が通る
竹にいさ梅にいさとや親雀
雀子やお竹如來の流しもと
慈悲すれば糞をする也雀の子
雉子鳴やきのふ燒れし千代の松
夕雉子の走り留りや鴉の海
黑門や下タに〳〵と雉子の聲

獨坐

おれとしてにらみくらする蛙かな
向〳〵に蛙のいとこはとこかな
めでたさの煙霧へてなく蛙
我を見て苦い貌する蛙かな
象かたや櫻をたべて鳴かはづ
玉川や先御先へととぶかはづ
ゆうぜんとして山を見る蛙哉

南都

朝起の古風を捨ぬ乙鳥哉
畫飯をたべにおりたる雲雀哉
横乘の馬のつゞくや夕雲雀
棹鹿よ手拭かさん角の跡

右　八十五章　魚淵二休校

それ虻に世話をやかすな明り窓
神風や虻が敎へる山の道

奉納

おんひら〳〵蝶も金ぴら參り哉
てふ飛や此世の望みないやうに
葬からあんな胡蝶が生れけり
田に畑にてん〳〵舞の小てふ哉
門のてふ子が遣へばとびはへばとぶ
さをしかや蝶をふるつて又眠る

てふといふ嬢山路の案内しけるに、俄雨はら〳〵ふりければ

木の陰やてふとやどるも他生の緣

橋本町上人

陽炎や歩行ながらの御法談
かげろふや臼の中からま一筋
陽炎や蕎麥屋が前の箸の山
八巾上てゆるりとしたる小村哉
美しき八巾上りけり乞食小屋
我蒔た種をやれ〳〵けさの霞
かまくらや昔どなたの千代椿
栄の花や霞の裾に少しづゝ
かるた程門の栄の花咲にけり
大栄小栄喰ふ側から花咲ぬ
春の日や暮ても見ゆる東山
傘さして箱根越すなり春の雨

春甫新宅賀

安堵して鼠も寢るよ春の雨

婚禮

春雨や相に相生の松の聲
春雨や鼠のなめる角田川
穴藏の中でもものいふ春の雨
負弓の藪にかゝりて春の雨

鳩いけんしていはく

梟よつらくせ直せ春の雨

水江春色

すつぽんも時や作らん春の月
ついそこの二文渡しや春の月
春風や牛にひかれて善光寺
春の風おまんが布の形りに吹
狗(ころ)が鼠とるなり春の風

待〳〵し日永となれど田舍哉
手のひらにかざつて見るや市の雛
おらが世やそこらの草も餅になる
我宿は何にもないぞ巣立鳥
好〳〵や此としよりを呼子鳥

観音奉納

只たのめ花もはら〳〵あの通り
花のかげあかの他人はなかりけり

如病得醫

花を折拍子にとれししやくり哉
花の陰なむさん火打なかりけり
斯う活て居るもふしきぞ花の陰

三月十七日保科詣

花ちるやとある木陰も小開帳
人撰して一人なり花の陰
おとろへや花を折にも口曲る
花の木に鶏寐るや淺草寺
堪忍をいたしに行や花の陰
山の月花盜人を照らし給ふ

刈萱堂

花の世は地藏ぼさつも親子哉
花の木のもつて生れた果報哉

大和めぐりする人に旅の眞
言といふをさづけて

かならずよ迹見よそはか花の雲
今の世や猫も抄子も花見笠
有樣は我も花より團子かな
苦の婆婆や花が開けばひらく迎

山下常樂院に人〻こぞりて
尊とむ佛おはしけるが、と
し千百年の供養なりとて讀
經いと殊勝也。かくふつ〻
かなるおのれさへ、すぐせ
の結緣うすからざるにや、
か〻る時に生れ逢ふとのう
れしく、しばらく隨喜の泪
を拭ひぬ。そのかみ其角六
あみだかけて鳴らん時鳥と
ありしも、けふのやうなる
折にやあらん。是さへ今は
百とせのかたみと成りぬ。
かくいふけふもいつか又昔
とならん。されど我後の世
をたのみおく軒ばの梅さへ
持ぬ境界、御佛必見捨給ふ
なよ。

花桶に蝶も閉かよ一大事

新吉原

行灯ではやしたてるや花の雲

御所にて

棒突が隠でをしへる櫻かな
人聲にほつとしたやら夕櫻
櫻へと見えてじん〳〵端折哉
氣に入た櫻のかげもなかりけり
一本はさくらもちけり婆婆の役
此やうな末世を櫻だらけ哉

東西の花に散立られて心も
山にうつり行といふ日は三
月廿日也けり

煤くさき笠も櫻の降日哉
君が代の大飯喰ふてさくら哉

けふは町隣なる麻美と前の
日より約し置けるに、かれ
さはりありてやみぬ。さは

とて翌の命待ものかはとた
だ獨來たりしに、幸懐に五
元集といふものゝあれば是
究竟の句相手なり。

小坊主や親の供して山櫻

櫻〳〵と唄はれし老木哉

下〳〵に生れて夜もさくら哉

一夜さに櫻はさゝらほさら哉

鞦韆戯

ぶらんどや櫻の花を持ながら

櫻艸といふ題をとりて

我國は草もさくらを咲にけり

今少したしなくも哉菫艸

百兩の石につり合ふつゝじ哉

春の日の入所なり藤の花

根岸にて

山吹をさし出しさうな垣根哉

惣〳〵にきげんとらるゝ蠶かな

さまづけに育られたる蠶哉

やよ風這へ〳〵春の行方へ

地獄

夕月や鍋の中にて鳴田にし

餓鬼

花ちるや呑たき水を遠霞

畜生

散花に佛とも法ともしらぬ哉

修羅

擊〳〵に花の木蔭のばくち哉

人間

さく花の中にうごめく衆生哉

天上

かすむ日やさぞ天人の御退屈

右

八十三章

春耕
稲長校

夏之部

下谷一番の貌して更衣

おもしろい夜は昔なり更衣

としとへば片手出す子やころもがへ

けふの日や替てもやはり苫衣

立ながら綿ふみぬいて出たりけり

文虎が妻身まかりけるに

おりかけの縞目にかゝる初袷

小兒の行末を祝して

たのもしやてんつるてんの初袷

春日野の鹿に喚るゝ袷哉

大山詣

四五間の木太刀をかつぐ袷哉

鶯のほゝと覗くや花御堂

かくれ家や死ばすだれの青いうち

夕かげや鶯の小脇の夏花持

是ほどのぼたんと仕かたする子哉

てもさてもても福相のぼたん哉

通ひ路に階子わたすやかきつばた

二十四年榮花只一夜夢

善盡し美を盡してもけしの花

芥子さげて群集の中を通りけり

卯の花の垣に名代のわらぢ哉
菴の苔花さくすべもしらぬ也
我上へ今に咲らん苔の花
乾く迄繩張る庭や若葉吹

禪寺

隅〳〵も掃除屆くや木下闇
法談の手まねも見へて夏木立
せい出してそよげ若竹今のうち
若竹と呼るゝうちも少かな
あつばれの大若竹ぞ見ぬうちに
鮓になる間と配る枕かな

老翁岩に腰かけて一軸をさづくる圖に

我汝を待事久し郭公
これでこそ御時鳥松に月
ほとゝぎす俗な庵とさみするな
此雨はのつ引ならじほとゝぎす
せはしさを我にうつすな子規

鎭西八郎爲朝人礫うつ所に

時鳥蠅虫めらもよつく聞け
卯の花も馳走にさくか子規
先住のつけわたりなりかんこ鳥

閑窓

吉日の卯月八日も閑古鳥

高野山

地獄へは斯う參れとやかんこ鳥
前の世のおれがいとこか閑古鳥
雲を吐く口つきしたり墓
罷り出たるは此藪の墓にてゆ
目出度さはことしの蚊にも喰れけり
晝の蚊の來るや手をかへ品をかへ
我宿は口で吹ても出る蚊かな
隙人や蚊が出た〳〵と觸歩行
晝の蚊やだまりこくつて後ろから
蚊柱の穴から見ゆる都かな
とし寄と見てや鳴蚊も耳のそば
芝浦や初鰹から夜の明る
蜘の子はみなちり〴〵の身すぎ哉
かはほりやさらば汝と兩國へ
鹿の親笹吹風にもどりけり
神國に天から藥降にけり
五月雨の竹にはさまる在所哉

妙義

五月雨や夜もかくれぬ山の穴

粒〻皆心(辛カ)苦

もたいなや晝寢して閑田植唄
早乙女や箸にからまる艸の花
寐せつけし子の洗たくや夏の月
茨の花笑をまたげと咲にけり

右
五十八章

呂芳
士英校

日〻惰怠不惜寸陰

けふの日も棒ふり虫よ蛩も又
ひいき鶺は又もから身で浮みけり
はなれ鶺が子の笠舟にもどりけり

初螢ついとそれたる手風哉

不忍池

螢火や呼らぬ亀は膳先へ

きれわらぢ螢とならば隅田川

夕月や大肌ぬいてかたつぶり

柴の戸や錠のかはりにかたつぶり

かたつぶりそろ〳〵登れ富士の山

なか〳〵に安堵貌なり羽抜鳥

扉が雨など輕んじてぬれにけり

六月や月夜見かけて煤はらひ

小金原

母馬が番して呑す清水哉

大來たらかへるになれよ冷し瓜

旅人や山に腰かけて心太

無限欲有限命

此風に不足いふなり夏坐敷

旅瘦をめでたがる也夏坐敷

松影や扇でまねく千兩雨

手にとれば歩行(あるき)たくなる扇哉

西山や扇おとしに行月夜

獨樂坊を訪ふに錠のかゝりければ三界無安といふ事を

蠅よけの草も釣して扨どこへ

豐年の聲を上けり門の蠅

蠅一つ打てばなむあみだ佛哉

世がよくばもひとつとまれ飯の蠅

侍に蠅を追せる御馬かな

やれうつな蠅が手をすり足をする

蚤の跡かぞへながらに添乳かな

のみ燒て日和占ふ山家かな

蚤の跡それも若きは美しき

蟬鳴や我家も石に成るやうに

蟬鳴や天にひつゝく筑摩川

ねがはくは念佛を鳴け夏の蟬

新家賀

涼しさや糊のかわかぬ小行燈

奉甫京へ行を送る

涼しからん這入口から加茂の水

兩國橋上

下見ても法圖がないぞ涼船

草雫今拵へし涼風ぞ

藪村の貧乏馴て夕涼

魚どもや桶ともしらで夕すゞみ

涼しさや彌陀成佛の此かたは

銚子にて

朝涼や汁の實をつる脊戸の海

きのふは鮮魚に宴してけふは松字佛

夜涼か笑ひ納めてありしよな

涼風やちから一ぱいきり〴〵す

すゞ風も隣の竹のあまり哉

身の上の鐘ともしらで夕涼

上總國百首の郷は、東南に山連り、西北にらみ開けて、防人の備へに究竟の地なりとて、此度陣屋いとなむ繩張といふと有。其島の瘤のやうにさし出て妨なる小家あり。主と見へて翌をもしらぬ老婆ひとり麻をうみて

居たりけるを、奉行人深く憐みて汝子ありやといへば、老婆いふ、をのこひとりもちたりけるが、いつ〳〵のとし古郷をよそにふり捨て、今は江戸の本所とやらんに、人の髪ゆふわざをなすよし、風のたよりに聞侍るとばかり、泪はらひ〳〵こたふ。さあらば其男呼返すべし、よろしき替地にかひ〳〵しき家をあたへん、しかのみならず其男には永く髪結司のゆるし文とらせて、汝には生涯二人ふちといふを申下して、身をやすくすぐさせん。あさ糸の細き縒ひをやめて、遲々たる春の日にはちりかふ花に無常を觀じ、凄々たる秋の夜にはかたぶく月に西方をねがひ、明暮心任せに菩提の種を蒔なば、なんぼうたのしからん。汝が此家このかまへのさはりになるこそ、天より汝に幸ひ下し給ふなれ。とく〳〵髪をしりぞき、あしこにうつれよといふに、老婆むく〳〵とはらたゝしきそぶりして、灯心つかねたらんやうなる首打ふり〳〵いふやう、よくもあざむき給ふものかな。是はわらはが先祖より、いく世ともなく住ふるして、大事の〳〵栖なれば、たとへ黄金星にとゞく程給るとも、我目には一椀の麥飯にしかずとこそ思ひ侍へ。たゞ〳〵此はにふの小屋こそさうなき寶なれ、よしや命斷るとも外へは行かじ、と手すり足すり貝を作りてなかぬばかりに申せば、奉行人の慈悲も今は施すべきよすがなく、老婆のちになくひそと、ふたゝび繩はりして、ついに其家をよきて地とりなりぬ。あはれ月日の照らすかぎり、霜雪のおつる所に生とし活るもの、たれか國命そむき奉らん、しぶときをこの者にぞありける。

月さへもそしられ給ふ夕涼み

碓氷にて

しなの路の山が荷になる暑哉
蕗の葉にぽんと穴あく暑哉
迹からも又ござるぞよ小夕立
湖水から出現したり雲の峰
蟻の道雲の峯よりつゞきけん
投出した足の先なり雲の峰
川狩や地藏の膝の小脇差
川狩のうしろ明りやむら木立

玉川

萩もはや色なる浪や夕はらひ
麻の葉に借錢書て流しけり

右　五十五章　素鏡　文路校

秋之部

秋立や隅の小隅の小松島

狗子有佛生

秋來ぬとしらぬ狗か佛かな

星さまのさゝやき給ふけしき哉

牽星にいて披露せん稲の花

嫦星の御顏をかくす榎かな

子寶が蚯蚓のたるぞ梶の葉に

病中

うつくしや障子の穴の天の川

木曾山へ流れ込けり天の川

わらぢながら墓參りして

息才で御目にかゝるぞ艸の露

末の子や御墓參りの箒持

亡妻新盆

かたみ子や母が來るとて手をたゝく

玉棚や上坐して鳴きりぐす

魂送

おれが場もとくたのむぞよ佛達

精靈の立ふる舞の月夜哉

山里やあゝのかうのと日延盆

べつたりと人のなる木や宮角力

草花を腮でなぶるや勝角力

板行にして賣れける負角力

椽はなや二文花火も夜の躰

稲妻やうつかりひよんとした貌へ

神前

秋風や草も角力とる男山

高井野の高みに上りて

秋風や磁石にあてる古郷山

病後

かな釘のやうな手足を秋の風

さと女三十五日

秋風やむしり殘りの赤い花

秋風の吹けとは植ぬ小松哉

蟲染の蝶がとぶなり秋の風

正見寺の上人十ばかりなる後住を殘して遷化ありし哀さに

秋風やちひさい聲のあなかしこ

五十過ては

露はらり〳〵大事のうき世哉

露置や茶腹で越るうつの山

しら露やいつもの處に火の見ゆる

露ちるや地獄の種をけふも蒔く

しら露に淨土參りのけいこ哉

火ともして生おもしろや草の露

男女私にちぎりて夜ひそかに逃行を敎訓して

人間は露と答へよ合點か

愛子を失ひて

露の世は露の世ながら去ながら

露ちるやむさい此世に用なしと

あり明や淺間の霧が膳を遣ふ

寢がへりをするぞ脇よれきりぐす

彌陀堂の土になる氣かきりぐす
きりぐす聲が若いぞくよ
　經堂
虫の屁を指して笑ひ佛かな
寒いぞよ軒の蜩唐がらし
其分にならぬくと蟷螂哉
古犬や蚯蚓の唄にかんじ貌
御祭に赤い出立のとんぼ哉

二百十日

世の中はよすぎにけらし草の露
御目出度存ゆけさの露
　うどん花
甘い露ばせをさく迎降りしよな
朝顔や人の貌にはそつがある
朝貌の上からとるや經(きん)(金)山寺
女郎花あつけらこ(か)んと立りけり
鬼灯を膝の小猫にとられけり
　萩寺
存の外俗な茶屋あり萩の花
耳に珠數かけて折なり草の花

入相の閉處なり草の花
きりくしやんとしてさく桔梗哉
むだ花に氣色とられし瓢かな
江戸川や月待宵の芒船
名月や先はあなたも御安全
明月の御覽の通りくづ家哉
　病中
名月やばかり立居むづかしき
明月のさつさと急ぎ給ふかな

右
六十二章

希杖
楚江校

明月を取てくれろと泣子哉
　姥捨山
けふといふけふ名月の御側哉
　赤馬關
名月や蟹も平をなのり出
　筑摩川舟留
名月やつい指先の名所山

やかましかりし老妻ことし
なく
小言いふ相手もあらばけふの月
　姥捨などゝは老足むつかしく
有合の山ですますやけふの月
　月蝕
人貌は月より先へ缺にけり
むだ草も穂にほがさいて三日の月
深川や蠣殼山の秋の月
　奉耕孫祀
門の月ことに男松のいさみ聲
聖の夜の月を請合ふ爺哉
明く口へ月がさすなり隅田川
秋の原知たらなんぞうたふべき
秋日和とも思はない凡夫哉
なぐさみのはつちくや秋日和
　母のなき子の這ひならふに
をさな子や笑ふにつけて秋の暮
　病後
ゑいやつと活た所が秋のくれ

中〳〵に人と生れて秋の暮

八月二十九日善光寺詣

本堂の柱に長崎の舊友たれかれ、八月二十八日詣るとしるしてありけるに、今は三十年餘りの昔ならん、おのれ彼地にとゞまりて、一つの鍋のもの喰ひて笑ひのしりむつましき人達なり。あはれきのふ參りたらんには面會してこしかた語りて心なぐさまんものを。互ひに四百餘里の道程へだゝりぬれば、ふたゝび此世には逢ひがたき齡にしあれば、しきりにしたはしくなつかしくなん。

近づきの樂書見へて秋の暮

茶店の万灯日ましにへりぬ

兩國の兩方ともに夜寒哉

六十にふたつふみ込夜寒哉

あばら骨なでじとすれど夜寒哉

若僧の扇面に

影法師に恥よ夜寒のむだ歩行

旅

一人と帳面につく夜寒かな

草藪も君が代を吹小夜きぬた

豐秋

二軒家や二軒餅つく秋の雨

外が濱

けふからは日本の鴈ぞらくに寢よ

旅にありて

鴈啼やあはれ今年も片月見

白川や曲り直して天津鴈

田の鴈や里の人數はけふも減る

おちつくと直に鳴けり小田の鴈

天津鴈おれが松にはおりぬ也

朝夕や峯の小雀の門馴る

立鴫の今にはじめぬ夕かな

普陀らくや蛇も御法の窩に入

蛇も入穴はもつぞよ鈍太郎

足枕手枕鹿のむつましや

しき嶋や深山の鹿も色好む

やさしさや鹿も戀路に迷ふ山

人ありと見せる草履や田番小屋

米穀下直にて下ゞなんぎなるべしとはこと國の人うらやましからん

日本の外が濱まで落穂哉

旅人の垣根にはさむおち穂哉

姨捨はあれにゆとかゝしかな

人はいざ直な案山子もなかりけり

穂芒や細き心のさわがしき

癸に正風院此奥に百花あり

門に立菊や下戸なら通さじと

大菊や今度長崎よりなどゝ

勝た菊大名小路通りけり

まけ菊をひとり見直す夕哉

后の月

月の貌としは十三そこらかな

名所紅葉

缺椀も同じ流れや立田川

棹鹿の水涕拭ふ紅葉かな

大寺の片戸さしけり夕紅葉

海草

人をとる茸はたして美しき

茸狩のから手でもどる騒かな

月隠山

初梨の天から降た社だん哉

柿の木であいと答へる小僧哉

小布施

拾はれぬ栗の見事よ大きさよ

虱を捨りつぶさんとのいたはしく又門に捨て斷食さするも見るに忍ばざる折から御佛の鬼の母にあてがひ給ふものをふと思ひ出して

我味の柘榴へ遣す風かな

老の身は今から寒きも苦になりて

山畠や蕎麥の白さもぞつとする

秋の夜や障子の穴の笛をふく

庵の夜や寢あまる罪は何貫目

末枯や諸勸化入れぬ小制札

九月盡

けふまではまめで鳴たよきりぐ〜す

右 六十四章　雲士 掬斗校

冬之部

やあしばらく蟀だまれ初しぐれ

ぼた餅の來べき空なり初時雨

初時雨夕飯買に出たりけり

目ざす敵は雞頭よはつしぐれ

旅

しぐるゝや家にしあらば初しぐれ

桑名

蛤のつひのけぶりや夕しぐれ

途中にて素玩に逢ふ

しぐれ込め角から二軒目の菴

夜しぐれやから呼されしあんま坊

人の爲しぐれておはす佛かな

悼

鳴烏こんなしぐれのあらんとて

盛人おのが古郷に隱れて縛られしに

業の鳥畏を巡るやむら時雨

栞畠を通してくれる十夜哉

もろ〜の愚者も月夜の十夜哉

嵩ひよろゝひゝよろ神の御立げな

桃青靈社

御寶前にかけ奉る初しぐれ

はせを忌やとしもまめで旅虱

義仲寺へ急ぎ候初しぐれ

はせを忌や畫から錠の明く庵

はせを忌に丸い天窓の披露哉

御取越餡で餅くふはなし哉

春日山

さをしかやえひしてなめる今朝の霜

霞まで生やうものか霜の鐘

橋上乞食

母親を霜よけにして寝た子哉

道分

霜がれや鍋のすみかく小傾城

霜枯や新吉原も小藪並

一人旅

次の間の灯で膳につく寒哉

としかさをうらやまれたる寒哉

上野の麓に蝸牛のから家かりて、霽の間の夢のむすび所とす。きのふあたり住倦たる人のなせるわざにや、垣の薺のそれなりに枯て、其實はほろ〳〵落たり。いく人の泪をかけし果とも思れて、秋にたち増りて哀なり。又門口に二尺ばかりなる(「哀なり」以下十四字の脱文、別本によりて補ひたり)土をならして菜のやうなるもの蒔置けるが、雪の片隅にほや〳〵と青みぬ。是必愛度春を迎へて餅いはふべき且の料ならんか。壁は七福即生の守り張重て、盗人の賂を防ぎ、鑑は大根注連といふものを引はへて、回祿を逃んとす。荒神松はいまだ野の色ながら横さまにこけたり。皆たゞ行末いつ迄か住果んあらましぞと見ゆるも、今は雲にや迹をくらましけん、山にや影をかくしけん、すべていづこかついの栖ならん。かくいふ我もしばしが程に又人にかくいはれんことをおもふのみ。

身に添や前の主の寒迄

文化六年十二月十五日

賀舊家大川氏

木枯や千代に八千代の門榎

木がらしや雀も口につかはるゝ

水仙や大仕合のきり〳〵す

水仙や垣に結こむ筑波山

嵯峨村と名乗り貌なり枇杷の花

おち葉して日向に醉し小僧かな

落葉して三月ごろの垣根哉

花鋼委地無人敢

思ひ草思はぬ草も枯にけり

枯芒昔婆〻鬼あつたとさ

女郎花なんの因果で枯かねる

大根引大根で道を教へけり

雉子なども粗鳴にけり大根引

鳴雀其大根も今引ぞ

爐開やあつらへ通り夜の雨

朝晴にはち〳〵炭のきげん哉

分てやる隣もあれなおこり炭

炭の火に峯の松風通ひけり

炭の火に月落烏鳴にけり

榾の火にうしろむけけり最明寺

榾の火や目出度御代の顔と顔

旅

斯う寐るも我火燵ではなかりけり

嵯峨山

はや〳〵と誰冬ごもる細けぶり

歸庵

留主札もそれなりにして冬籠

小人閑居成不善

冬籠惡もの喰のつのりけり

さし捨し柳の陰を冬籠

眠り様驚に習ん冬ごもり

西の木と聞てたのむや冬籠

はせを塚先拜むなりはつ紙子

加茂の水吉野紙子とぼたへけり

大坂八軒家

舟が着てねとはぐふとん哉

祐成がふとん引はぐ笑ひ哉

今少鴈を聞迎ふとんかな

漏どのがおそろしといふ衾哉

三日月と肩をならべて網代守

網代守爰にとゑへん〳〵哉

網代守天窓で楫をとりにけり

さきのとしの大なひに鳥海山はくづれて海を埋め、甘満寺はゆりこみ沼とかはりぬ。さすがの名どころもまとにうらむがどくなりけり。

象がたの鈇を摺で鳴千鳥

御地藏と日向ぼこして鳴千鳥

おちつきにちつと寐て見る小鴨哉

汝等も福は待かよ浮寐鳥

みそさゞいちゝといふても日が暮る

戸をかくして母の夜伽かな

門口に來て氷るなり三井の鐘

一さんにとんで火に入あられ哉

盛任がしやつ面たゝくあられ哉

初雪や俵の上の小行燈

はつ雪や今行里の見へて降

初雪やこきつかはるゝ立佛

初雪や鳥も構はぬ女郎花

石の上の住居のこゝろせはしさよ

雪ちるやきのふは見へぬ借家札

くる人が道つけるなり門の雪

ちとたらぬ僕や隣の雪もはく

むまさうな雪がふうはり〳〵とぼちや〳〵と雪にくるまる在所哉

犬どもがよけてくれけり雪の道

雪ちるや脇から見たら榮耀駕

十二月二十四日古郷に入

是がまあ終の栖か雪五尺

一茶病中のていたらく

枉なりに吹込雪や枕もと

棧や凡人わさに雪舟を引く

壺は又どこの月夜の里神樂

行人を皿でまねくや藥喰

鰒汁やもやひ世帶の惣鮎

出始を祝ふてたゝく瓢かな

一夜さは出來心なり寒念佛

寒念佛さては貴殿でありしよな

叱らるゝ人うらやましとしの暮

梟よのほゝん所か年の暮

ともかくもあなた任せのとしのくれ

節季候や七尺去て小せきい

夕月や御煤の過し善光寺

念々相續

みだ佛のみやゞに年を拾ふ哉

節分

福豆やふく梅干や齒にあはぬ

かくれ家や齒のない聲で福は内

餅花の木陰にてうちあはゝ哉

神の灯や餅を定木に餅をきる

我門へ來さうにしたり配り餅

わんといへさあいへ犬もとし忘れ

長崎

君が代やから人も來て年籠

き丶給へ竹の雀もちよ〳〵と

琵琶湖

龜どの丶いくつのとしぞ富士の山

天下泰平

松蔭に寢て喰ふ六十餘州哉

右百六章　文虎　春甫校

（右百六章は冬之部のみの句數にして雜の八句は加はらず）

雜

おのづから頭が下るなり神路山

掃溜へ鶴の下りけり和歌の浦

月花や四十九年のむだ歩行

鶴の子の千代も一日なくなりぬ

佛ともならでうか〳〵老の松

牧人七十賀

朝菜つみ夕菜つみつ丶つむとしのつ

むりの雪ぞ野らにまがへる

世の中はかくてもへけれぬるてふの

夢見てばかり身をすぐす哉

かつしかの栖立退く日、さし木のめ吹たるに

古菴にのち住人よ花さかば心さし木

の櫻とをしれ

いさましの老木さくらや靈が日に倒

るゝ迄も花は咲ぬる

うつ波に千度しづみてうき草のうき

世並とて花や咲らん

夕立のまだ晴やらぬ木の間より雫な

がらに出る月かな

功成身退といふ事を

里〳〵を涼しくなして夕立の光りし

りぞく山の外かな

七夕の人見給はゞむさしの丶草葉の

むしとおぼしめすらん

念彼觀音力

稲の穂よ南無稲の穂よ〳〵かゝるみのりの秋はあらじな

行雲の迹からはける青空へうそを月夜のむらしぐれかな

木曾おろし雲吹盡す青空のはづれにけぶる淺間山かな

こちあなぢ風のまに〳〵吹けばとぶ塵の身にさへせはしなの世や

いくばくのなげきこりつむ小車の下り坂なる我齢かな

みちの〳〵へたつとて

ながらへて歸らん事もしら川の關を越行老の身なれば

追風にうしろ任せてあみだ笠おのづと西へ吹れ行くなり

月を覆ふ雲花を散す風、善惡表裏はめぐれる車の輪の如しと、いにしへの人のことばこそむべなれ。我師は能これを曉し生涯を自然に任せられしに、いぬる文政丁亥の冬身まかられてのち、教へを請し人〳〵、遠き境までも最寄〳〵にいひ傳へ、はやくもかけあつまりて、殘れる人にものとふに、いひおける一言もなく、そのうへ何者のわざにや、日頃机のほとりにつみ重ねたる反故ものゝ本どもをさへ、空吹拂ふ風の塵ばかりもなく失はてゝ、いたづらに漉かへす紙のうちにやひさがれけん。哀れ尊き文もあらんに、見る人なくばねう比丘にこがねうちくれし諭に同じ。手の物とられしこゝちして、おの〳〵むなしく家に歸り、訪れし時〳〵書捨おかれし筆の跡とり出し、或は行かふ市の屋見世などに見當る行脚の時の日記やうなるもの、價もてこれを求などしつゝ、あしこ矣ひろひ集てこのふたつの卷となすは、ながきかたみと見るべきまで也。

文政十あまり二とせといふ年の冬俳諧寺の沙彌　某しるす

文政十二年丑七月

信州　俳諧寺

門從藏板